

ハイスクールDxD JOKER ～禁断の果実をその手に

ナシカ30

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

黒いリンゴ 凶鑑にもネットにも載っていない謎の果実

この空腹の果実は、世界を揺るがす厄災か…世界を守る切り札か。

ハングリージョーカーのキャラクターはハイジのみ出す予定です。要望があれば善処します。

主はハイスクールDxDアニメ勢なので小説版のみの描写はありません。(あるかも知りません)

アニメを振り返りながらの執筆なので投稿ペースは遅めです。すいません

ハイジの過去等は全てオリジナルです。

別エウレカも基本ハイジが使います。体への負担等の設定は後々作りますのでお待ちください。

1月30日追記 オリジナルエウレカはストーリー進行のために追加することがあります。

目次

case 0	唯一の記憶／新たなる家族	1
断片1	旧校舎のディアボロス／悪魔と墮天使と万有引力	
case 1	イツセーに彼女？	4
case 1.5	兄はデート、オレはどうしよう	8
case 2	乗り込め旧校舎	10
case 3	乗り込んだBrother	19

オレには記憶がない

いや、それは正しい表現ではないな、言い直すとしよう。

オレにはただ1つの記憶しかない

目の前に広がる死体の山、だが見たところその死体は人間だけではないように見える。

死んでいる者の中には背中から翼を生やしている者もいるのだ。

真っ黒な蝙蝠のような翼を生やした者

真っ黒な鳥のような翼を生やした者

真っ白な鳥のような翼を生やした者

そして人間

この4種類の死体が混ざり合った山、そして真っ黒なリンゴ、これがオレの唯一の記憶だ。

そして自分の過去を思い出す唯一の手がかりでもある。

気がつけば俺はある施設に居た、子供達が多くいる、おそらく児童養護施設だろう。

しかしなぜ居るのは全く思い出せない。何故かあのリンゴも一緒のようだ。正直都合がいい、あれはオレの過去の手がかりだ、手放したくない。

この施設の園長が声をかけてきた。俺がなぜここに居るのかを聞くと、倒れていたのだから連れてきたそうだが、リンゴはオレが大切そうに持っていたから一緒に持ってきたらしい。

なるほど、なぜ倒れていたのかは思い出せないがありがたい話だ。

園長にはいろいろな質問をされたが記憶がないので何も答えられない。自分の名前、家、両親。何も知らない。幸いなのか自分の年齢と誕生日だけは覚えていた。

8月12日生まれ、今年で11歳しかしこれだけしか分からない。とりあえず名前がないと呼びづらいからと、誕生日との語呂合わせで

（ハイジ）と付けてもらった。ふむ、なかなか悪くない名前だ。

オレはここに来てからとりあえず本を読みまくった。知識は必要だからな。あとは施設の人達が勉強を教えてくれた。不思議なことに問題は全て解ける。小学生レベルから大学レベルまで全て。ふむ、これは記憶を失う前にそのレベルが解けるまで勉強をしたということか？全く分からないが、勉強の必要はなくなったわけだ。本もあらかた読んだし、この前他の子供がやっていた（げえむ）というものをやってみるか、実に興味が湧く。

オレがここに来てから1年、園長から話があると言われ園長室に来ている。とりあえずノックして入るとしよう。

コンコン

「どうぞ」

「失礼する」

「いらつしゃいハイジ、急に呼んでごめんなさいね。」

「構わない、ちょうどマ●オカートを終わりにして暇になったところだ。」

「そう、ハイジがこの生活を楽しんでくれているようで良かったわ。それであなたをここに呼んだ理由なのだけど、あなたを引き取りたいと言っている人が居るの。会ってもらえないかしら？」

「うむ、問題ないぞ」

「そう！良かったわ！じゃあ連絡しておくわね。」

2日後、引き取りたいと言っていた家族が施設にやって来た。やって来たのは3人、オレと同じくらいの年であろう男の子、そしてその両親だろう男性と女性が一人づつ。

ふむ、この人たちがオレを引き取るのか、見たところ仲の良さそうな家族だな。優しそうだ。

「こんにちは、俺は兵藤吾郎、園長とは昔学校の同級生でね。この前会った時に君の話聞いてぜひ引き取りたいと思ったんだよ。」

「ふむ、そうだったのか吾郎殿、オレとしては引き取ってもらって構わない。迷惑のないように過ごそう。」

吾郎殿と奥方は少し驚いたような顔をしたが、笑ってオレを受け入れてくれた。やはり優しい人だったようだ。

「なあなあ、なんでそんな喋り方なんだ？」

息子殿が話しかけてきた、そんなに変な喋り方だろうか？………確かに普通では無いかもしれないな。

「癖になってしまっていてな、なかなか治らないのだ、すまない息子殿。」

「ふーんそうなのか。俺、一誠！よろしくな！ハイジ！」

ふむそうだな、これから家族になるわけだし、息子殿と呼ぶのもおかしいな。

「ふむ、よろしく頼む イッセー」

こうしてオレ、ハイジは兵藤家の一員となった。

そういえば園長の許可は貰ったしあの金槌と紙は貰っていこう。

断片1 旧校舎のディアボロス／悪魔と墮天使と
万有引力

case 1 イッセーに彼女？

「ふむ、やはり放課後はここで寝るに限るな。」

グラウンドの隅の木の影、オレは右手で赤いリンゴを転がしながら考える。春の風が心地いい。そして……

「「キヤー!!!」」

いつも通り聞こえてくる女子の叫び声。

「はあ、イッセーのやつまたやっているのか」

全くうちの兄貴はこうも懲りずによくやるものだ。

引き取られてから4年と数ヶ月が経った。父さんと母さんはオレを中学に通わせてくれた。感謝しなければならぬ。学校は記憶上初めて通ったので少し心配だったが、勉強面は全く問題なかった。まあ大学レベルが問題なければ当たり前か。中学三年間は全く問題ない学生生活を過ごせた。おそらく充実した学生生活だったのだろう。オレの記憶についてだがあまり成果は得られなかった。しかしリンゴの正体は分かった。施設から貰ってきた金槌と紙も同じ類のものだ。とりあえずこのリンゴや金槌のようなものをエウレカと呼ぶことにした。まあ名前はなんでもいいんだかな。

高校進学の時、先生はオレの学力ならどの高校でも行けると言っていた。ふむ、そうなのか、特に行きたいところもないんだがな。なら兄貴と一緒に学校に行くか。オレはイッセーのことを家では兄貴と読んでいる。まあ呼びだしたのは中学二年からだ、学校ではイッセー呼びだが……まあ問題ないだろう、兄貴もそれで納得している。

ということでおレと兄貴は駒王学園に通うことにした。兄貴が進学した理由は不純だったようだが。まあオレの今までのことはこれくらいにして現在に戻るとしよう。

「またやっていったのか、イツセー。毎回毎回懲りないものだな。」
「ん？なんだよイヤミか？成績優秀でモテモテなハイジくんよ。」
「成績などただの結果でしかない、誰でも取れる。そして現在オレは不純異性交遊に興味はないぞ。」

「はあ!?お前本当に男かよ!?男ならおっぱい大好きだろ!?!」

「ふむ、乳房がなんだというのだ?」

「…悪かった、お前はそういうやつだったな。そうだった」

「なぜ呆れているのかオレには分かんが、まあいいだろう。オレは帰るが、イツセーはどうする?」

「んー、俺はもう少ししたら帰るわ、お袋にはそう言っといてくれ。」
「了解だ、では先に帰るとしよう。また後でな兄貴。」

ふむ兄貴は相変わらずだな、さてオレは帰ってMAXコーヒーでも飲みながらス●ブラするとしよう。最近新作が出たばかりだからな、練習しなければ。

晩飯の時兄貴がニヤニヤしていたが何かあったんだろうか?

ピピピピ ピピピピ

「んー……眠いな……」

やはり夜更かしが過ぎたか…5時までではやり過ぎたようだな。

「今の時間は……10時…か。ふむ、完全に遅刻だな。」

これはしようがないな。ゆっくり行くとするか。しかしなぜ10時に目覚ましがなったのだろうか?分からないな、まあいいか。

「さて着替えたし行くとしよう、母さんにバレると面倒だ。」

こっそりと音を立てずに家から出ようとする。…が

「ハイジちゃん?今まで何してたの?」

階段の下には母さんが居た。後ろに鬼が見える。

「寝ていた。す、すまない。」

「全くしようがない子ね。まあ成績もいいから見逃してあげます。早く行きなさい。」

許してくれた母さんには感謝だな、圧倒的感謝、ありがとう母さん。

とりあえず学校へ行くとしよう。

この時間の日差しはなかなか気持ちがいいな。

ガラガラガラ

「おはようございます」

オレは授業中の教室に堂々と入っていく

「兵藤遅いぞ、早く席に着け。」

今の科目は化学、オレが1番仲の良い先生の授業だったのは幸いだろう。周りからかなりの野次が飛んでいるが気にしない。

「おいハイジ！お前何してたんだよ！」

「何をしていたも何もただの寝坊だが？イツセーなら知っていると思っただが。」

「確かに寝てたもんなお前。まあいい、今の俺は機嫌がいいんだ！」

松田と元浜が泣いている、何かあったんだろうか。

「何かあったのか？イツセー？」

「ふふん！実はな、彼女が来た！」

………は？ え、ちよ、ま、…は？

ふむこれはあれか、変態をこじらせてしまったのか？

「兄貴、ついに壊れてしまったのか。家に帰ったらオレのMAXコーヒーをやろう、気が休まるぞ。」

「いや、あの甘いコーヒーは要らないし俺は壊れてねえよ。本当に彼女が来たんだよ。」

「まあにわかには信じ難いがいいだろう、そういうことにしておく。」

うちの兄貴は大丈夫だろうか。ついに妄想と現実の区別がつかなくなってしまうのか、心配だ。

く

帰宅途中、兄貴からメールが来た。

「明日デートに行くから邪魔すんなよ！」

なぜ同じ家に帰ると言うのにこのタイミングでメールをしてきたのか分からない。

やはりオレの兄貴はバカだったのだろうか…

本当に大丈夫だろうか、昔作った盗聴器探しておくか……

「じゃあハイジ、俺行ってくるわ。絶対！邪魔しにくんなよ！」

「兄貴、それはフリか？」

「違うわい!!!」

現在オレは、デートに出かける兄貴を見送るため玄関にいる。声を聞くだけで楽しみだと言うのが伝わる。ちよつと意地悪したいが、まあ我慢するとしよう。兄貴に彼女なんてもう出来ないかもしれないからな。

「そういえば兄貴、彼女さんの名前はなんて言うんだ？」

「ん？ああ、そういえば教えてなかったな。天野夕麻ちゃんって名前だよ。ほら、こんな子。」

そう言っただけで彼女の写真を見せてくる兄貴。

ふむ、顔も整っていて美人と言える女性だ。こんな女性が兄貴の彼女とは、ますます信じられんがそれはもういいだろう。もう考えるのも嫌になる、この話で昨日何回喧嘩したか……

「行ってくる。帰り遅くなるかもだから。」

「了解。」

ガチャン

「さて、と……オレは今日どう動くとするか、母さんと父さんは今日帰って来るの遅いし……とりあえず連絡だけしておいて出かけるか。」

父さんと母さんは昨日から出かけている。

父さんは昔からの友人とゴルフに泊まりで、

母さんはご近所の奥さん方と1泊2日の温泉旅行。

そして兄貴はデート

いつも1人だから問題はないが、特にやることもないな。こういうのが1番困る。休日はなるべくに外出たい性分なのだが、今日は特にイベントもなかったはずだ。

「適当に散歩でもしながら遊ぶとしよう、幸い金はある。」

以前出場した格闘ゲーム大会の賞金がたんまりあるため金には

困っていない。プロのゲーマーではないのだが、面白そうだと思いい練習し、大会に出たら勝ってしまったのだ。そういえば大会終わった後に勧誘されたな、断ったけど。

「さて、適当に出かけるとしよう。」

両親に連絡を入れ、出かけることにする。

財布にスマホ、とりあえずこれだけあれば散歩には十分、だが。今日は胸騒ぎがする。

以前ルビーの実験相手にした怪物みたいのが出てこなければいいが……

まあ出てきたとしても以前のように切り裂いてやればいだろう。まさか自分自身にもエウレカが埋め込まれていたとは思わなかった。あれは本当に驚いたな。

十数時間後 ハイジ帰宅

「ふう、楽しかったが疲れた、明日学校だし寝るとしよう。」

ハイジは帰宅後すぐ部屋に戻り寝てしまった。

ガチャ

その数分後、隣にある一誠の部屋から音がしたが、ハイジが気づくことは無かった。

「ん、ー……きて行くのでしょうか」

月曜の朝、これは学生にとって辛いものである。しかしこれから5日間やってくる平日には学校があり、嫌であろうがなんだろうが学業に勤まなければならない。

それでは少しハイジか登校するまでの話をしよう

時刻は5時、起きている者もいればまだ夢の中の者もいるだろう。ハイジは月曜と水曜はこの時間に起きて支度をし学校へ登校する。家を出るのは6時より少し前、寝ている兄貴に声を掛けてから出かける。

ハイジがこの時間に出かける理由は2つある。

一つ、朝は兄貴がうるさいから

去年の夏頃にいきなり兄貴が部屋に押し掛けてきて宿題を見せろと言ってきた、その時しようがないと教えてやってからあいつは、毎日のように押し掛けて来たのだ。めんどくさくなって押し掛けてくる前に出かけるようにしてからはいつもこの時間に出かけるのが習慣になったのだ。

しかし最近反省したらしく頼んでこなくなったので二日だけに減らした。

そして二つ、新しいエウレカを探すためだ

ハイジが現在所持しているエウレカは5つ、リンゴ、蛍光紙、金槌、ルビー、そして磁針。

エウレカ「ペレグリヌスの磁針」

13世紀ごろフランスのペトルス・ペレグリヌスと言う学者が、容器に入れた水の上に磁針を浮かせることで方位を図ると言うコンパスの原型を考えたらしい。

このエウレカは使用者を求めるものへと導く力を持っている。探しものがあればその捜し物がある場所へと使用者を導くことが出来

る。しかしこのエウレカが示すのは直線的な場所だけであつて距離などは分らない。だからなかなか見つけることは出来ないのだ。話はこの辺りにしよう、そろそろハイジが学校へ着くようだ。

「結局今日も収穫はなしか。さすがに歴史に残るような物をカントンに見つけることは出来ないか、手元に5つあるだけで奇跡だな。」

窓際の自分の席で缶コーヒーを飲みながら独り言をこぼす。朝日が差し込み輝いて見える彼の水色の髪と目は、美しく輝いている。

「ハイジくんかっこいい!」

「キヤーー!いつも通り美しいわ!」

周りから女子の声が響く、彼は駒王学園の二大王子と有名だ。本人は知らないようだが。

ガラガラガラ

教室の扉が開きイツセー松田元浜の変態三人が登校してくる。何かイツセーは浮かない顔だ、昨日は彼女とのデートだったというのに、

「おいイツセー、浮かない顔だな?なんかあつて!」おい席つけーホルムルーム始めるぞー』おつと」

もうそんな時間か、仕方ない

「すまない時間か、何かあつたなら後で話を聞こう。」

なんだこの違和感、朝は気づかなかつたがいつものイツセーじゃない?この雰囲気どこかで感じたような……とりあえず後で考えましょう、今は授業だ。

2 限目終わりの休み時間

イツセーがこつちへ来た、松田と元浜も一緒だ。

「ハイジ、イツセーのやつ頭いかれちまったのか?」

「あいつ変なもの食べてないか?それとも紳士のDVDでも見すぎたのか?」

上から松田、元浜の順で聞いてきた。特にこの土日変わったことは

おかしなことはしてなかったはずだが…

「ハイジ、天野夕麻ちゃんって覚えてるか？」

イツセーが深刻そうな顔で尋ねてくる。

天野夕麻：確かイツセーの彼女だったか？

それがどうしたというのだろう。

「覚えているが、それがどうしたのだ？」

ハイジが答えるとイツセー驚いたような顔で聞いてくる。

「お前は、覚えてるのか！　だよな！」

イツセーの反応と周りの反応からして、おそらく天野夕麻のことを覚えているのが俺しかいなかったということだろう。

しかし有り得るのか？金曜あれだけ悔しがっていた松田と元浜が覚えていないなんてことが、そんな魔法みたいな事が……

魔法？まさかエウレカ!?この付近にはなかったはずだが…一応記憶関連の歴史についても調べておくか

昼休み

チャイムが鳴り昼が来る。購買に行きいつも通りパンとコーヒーを買っていつもの場所、屋上へと続く階段に行く。屋上は立ち入り禁止で鍵がかかっているのだ。

「ハイジ先輩こんにちは」

「塔城か、こんにちははだな」

いつもの場所にいるいつもの後輩、

塔城小猫とは1ヶ月ほど前に知り合った。お互いに甘いものが好きということ話しが合い、こうしてよく昼食を一緒に取っている。

「ハイジ先輩っていつもリング持ってますね。好きなんですか？」

塔城が聞いてくる。確かに嫌いではない、しかしこれは好き嫌いではないだろう。

「なぜかリングが手元ないと落ち着かなくてな、だからいつも持っているんだ。」

まあ好きか嫌いかでいえば好きだがな。」

そうですかと軽く頷く塔城、そんな話をしているうちに昼休みが終

わる。さて午後の授業だ

「ではまたな塔城、今度また甘いものでも食べに行こう」

「はい、よろしくお願いします」

塔城と別れて教室に戻る。午後の授業を受ければあとは帰るだけ、昼のあとは眠いが耐えるしかないか

放課後

「イツセー、オレは図書館寄って帰るがイツセーはどうする？」

「ああ、俺は1人で帰るよ。ちよつと寄りたい所もあるし」

やはりイツセーに元気がない、これは急いで調べた方が良さそうだな。

3時間ほど図書館で記憶に関する歴史を調べたが、有力な情報は得られなかった。これはまた後日調べるとしよう。母さんから夕飯だから帰ってこいと言われているしとりあえず帰宅だ。

帰ってきて夕飯を食べた。兄貴はまだ帰ってきていない。結構悩んでいたし今日はそつとしておこう。

だが兄貴自身に何か起こっている可能性もある。明日は兄貴を観察することにしよう。

とりあえず寝る、おやすみ

火曜日

今日の起床時間は7時、スマホから目覚ましに設定していた音楽が流れる。

ゆつくりと体を起こし伸びをした後、着替えて登校の準備をする。少しすると兄貴の部屋からいつものよく分からない目覚ましの音が聞こえてくる。なんであるの目覚ましで起きれるのかオレには分からない。

「一誠く、ハイジちゃん、早く起きないと遅刻するわよ」

階段から母さんの声がする。起こしに来てくれているのだろう。

「分かった！分かったから！」

兄貴が部屋で騒いでいる。ドタバタとうるさい、全く何をしているんだ。

「お、お父さん！一誠が！一誠が！」

「母さん！どうした!？」

「外国人！ほ、本物よ！インターナショナルよお！」

インターナショナル？母さんどうしたんだ？

「兄貴く、どうしたんだ？」

「は、ハイジ!？く、来るんじゃないやねえ！」

ガチャ

部屋の中には生まれたままの姿の兄貴と、この人は…

「おはよう、兵藤ハイジくん」

「貴方は、リアス・グレモリーだったか…

すまない邪魔をした。ではごゆつくり」

とりあえず部屋を出る。兄貴より先に朝食をとって出かける。あそこに行ったら面倒くさそうだったのだ。

学校

「ハイジ！お前なんで先に行ったんだよ！」

イツセーが話しかけてくる

「うるさいイツセー、声が大きい」

「ああわりの。で、なんで行ったんだよ！」

ふむ、理由か……

「面倒くさくなりそうだった…から？」

「から？じゃねえよ！　まあいいや、もう授業始まるから行くわ」

カチッ

「ん？ハイジ、今何かしたか？」

「いや？特に何もしてないが？ほら授業始まるぞ。」

とりあえずごまかせたか

今イッサーに付けたのは盗聴器、昔遊びで作ったやつを引っ張り出してきたのだ。

今朝のリアス・グレモリーの1件もあるし、調査にはもってこいだ。

放課後

とりあえず今のところ不自然な所は無い。もう放課後だ、このまま何も無ければいいが…

「こんには、リアス・グレモリー先輩の遣いで来たんだ。僕に着いてきてくれるかな？」

「じゃあお前が？」

少し頷く遣いの人物、あいつは確か…木場祐斗だったか。

しかしリアス・グレモリーの遣いとは、盗聴器を使う必要があるだろうだな。スイッチを入れておこう。あとは…蛍光紙も必要か。

「ここは…旧校舎か、確か旧校舎はオカルト研究部の部室だったか。」

近くの木の陰で盗聴器から聞こえてくる声を確認する。

『なんだこの部屋は、』

盗聴器からイッサーの声がある。中はカーテンが掛かっていて外から確認できない。

『彼女は塔城小猫ちゃん』

これは木場の声か…まさか塔城まで一緒とは

『ギーーーーー！』

うるさい、あいつ大声出しやがったな

『あらあら、あなたが新しい部員さんですわね。私副部長の姫島朱乃と申します。』

姫島朱乃か、結構有名なメンツが揃ってるな、さてとそろそろ中を確認するか、

ハイジの目が赤くなり中に紋章のようなものが現れる。

するとハイジの目にはカーテンで見えないはずの旧校舎の中がハッキリと見えた。

エウレカ〔レントゲンの蛍光紙〕

ヴィルヘルム・レントゲン

X線を発見した功績により第一回ノーベル物理学賞を受賞したドイツの科学者

20世紀目のとある日、レントゲンは真つ暗な実験室で真空管のスイッチを入れた時、

2メートルほど先の作業台に置いてあった蛍光紙に小さな光を見つけた。それが当時全く新しい未知の放射線、X線の発見だった。

「物質を透過するX線の手で中を覗かせてもらうぞ、オカルト研究部」
中に見えるのは

イツセー、塔城小猫、木場祐斗、姫島朱乃、リアス・グレモリー
の5人だけ

『単刀直入に言うわ、私達悪魔なの』

悪魔、空想上の生物の名前が飛び出すとは思わなかった。しかしグレモリーが嘘をついているようには聞こえない。

次々にグレモリーは語り始める

悪魔、墮天使、天使、三竦みの関係、

興味深い話だ。にわかには信じ難い、しかし嘘ではないのだろう、話し方や声のトーンからそれが分かる。

『天野夕麻』

ほう、まさかここでその名前が出るとは、もしかしたら新たなエウレカの情報も手に入るかもしれない。

『どこでその名前を聞いたか知りませんが、その事をオカルトうんぬんで話されるのは困るって言うか…』

珍しい　怒ってるなイツセー

『彼女は存在していたわ、確かにね。これは墮天使、昨夜あなたを襲った者と同質の者』

昨夜？襲った？イツセーあいつ何に首突っ込んだんだ。

『で、でも！松田や元浜だって彼女のことを覚えてなかったし！アドレスや写真だって！』

『力を使ったのよ、私がああなたの御両親にしたようにね』

うちの両親に力を？

『その墮天使は目的を果たしたので、あなたの周囲からその記録と記憶を消した。』

目的？なんだそれは

『目的？』

やっぱりイツセーも分かってなかったか

『あなただを、殺すこと』

は？待て、イツセーを殺すことが目的？それが達成されている？…つまりイツセーは殺されたってことか、じゃあなぜ生きている？

分からないことが多すぎる。

それにイツセーが死んでるとかふぎけんなよ。直接聞かせてもらう

く視点変更く

一誠視点

「あなたのその身に物騒なものがついてるかどうか確認するため。それが確認されたから、あなたは殺された。」

「俺が、殺された？周りの記憶を消した？」

そんなこと出来るのか？光の矢？なんだそれ、

え？でもあいつは、じゃあなんであいつは覚えてたんだ！？

「待ってください！あいつは！ハイジは夕麻ちゃんのこと覚えてましたよ！墮天使ってやつが記憶を消したなら、なんであいつは覚えてたんですか！」

「なんですつて？覚えてる人間が居るの？」

なんでだ？なんでハイジは覚えてたんだ？

ドッゴーン!!!!

「なにが起こったの!？」

突然部屋の扉が吹っ飛んだ、すごい音だ。

リアス先輩達も何が起こったか分からないらしい。小猫ちゃんと木場は身構えてる。本当になんなんだ!？」

人影が見える

「さつきまで外から中を覗かせてもらってたが」

いつも聞いている声だ

「ちよつと聞き逃せないワードが聞こえたのでな」

いつも聞いている話し方だ

「悪魔、墮天使、天使の話はもちろん」

いつも一緒にいるあいつだ

「兄貴が殺されたって話、全部包み隠さず聞かせてもらおうぞ、リアス・グレモリー！」

兵藤ハイジ、俺の弟だ、

Case 3

乗り込んだ Brother

オレは黒いリングを齧り旧校舎の扉を吹き飛ばし入っていく
大きな音を立て入ってきたオレに初めに声をかけたのは兄貴だっ
た

「は!? え、ちよ、何これ! ハイジ!? なんでハイジがここに!? てか何その
馬鹿力!」

とても動揺しているようだがそれはこちらも同じ

「そんなことはどうでもいいんだよ! それよりも兄貴が死んでるって
話の方が先 n ガハッ!」

そこまで言っただけでオレは吐血し倒れる。

エウレカの連続使用 それ自体に問題はなかったが、とっさで出
力の調整を誤ったためかいつもよりも身体への負荷が大きかったら
しい

ハイジが気を失ってから30分後

「む、ここは……」

ゆっくりと目を開ける。ここは?

ロウソクの明かりのような淡い光が照らす薄暗い部屋、そして後頭
部にある柔らかい感触。

ああ、そういえば旧校舎に乗り込んだんだ……そうだ! 兄貴の
ことを聞かないと……

ん? 柔らかい感触?

「ハイジ先輩おはようございます」

完全に意識が覚醒する。目の前にあるのは俺と同じ甘い物好きの
後輩、塔城小猫の顔だ。

「む、おはようだ、塔城」

とりあえず挨拶をする。

ん? 塔城?

なぜ塔城の顔が真上に？

・・・これはあれか、膝枕を塔城にされているのか

とりあえず起きた方がいいだろう

「すまないな塔城、もう大丈夫だ。」

「ダメです。まだ寝ててください」

なぜか塔城に解放してもらえなかった。なぜだろう、彼女も辛いはずだが…

辺りを見渡すがイツセーはいないようだ、とりあえずそこで威張ってるリアス・グレモリーに話を聞くとしよう。

「リアス・グレモリー、長いからグレモリーと呼ばせてもらう。まずは扉を壊したことを謝罪しよう。済まなかった。」

「それは魔力ですぐ直せるから大丈夫よ。それより、一応この学園で私はあなたの先輩にあたるのだから、せめてグレモリー先輩と呼んで欲しいわね。」

「名前などただの記号だ。呼ぶのならば短い方がいい、最低限のマーナーとしてファミリーネームで呼んでいるだろう。」

「はあ、まあいいわ。それで？あなたは私に聞きたいことがあるんだったかしら？別に答えてあげてもいいわよ。」

「ふむ、ではまず「その代わり」…なんだ」

「私の質問にも答えてもらおうわよ。」

「いいだろう。しかし質問はオレからさせてもらう」

「いいわよ。長くなりそうだしお茶でも入れましょうか。朱乃 紅茶をお願いします。」

そう言われ 慣れた手つきで紅茶を入れ始める姫島

心地よい紅茶の香りが心を落ち着かせる、そして頭には塔城の柔らかない膝枕。天国と言う言葉がふさわしい状況だろう、しかし周りに居る者が悪魔を自称しては天国ではおかしいのかもしれないが。

「ではお互いに質疑応答をしよう。塔城、すまないが頭を上げさせてくれ」

「わかりました」と渋々了承する塔城、何故そんなに残念そうなのか分からないが。

「さて、こちらの質問だ。」

とりあえず天使、悪魔、墮天使この三すくみの話、この話は勝手に聞かせてもらったから良しとする。『え？勝手に聞いてたってどう言』オレが聞きたいのは兄貴が殺されたってところだ」

すつと目を細めるグレモリー達。

話の最も重要な内容であるがため、ストレートかつ慎重に必要な情報をすくい上げる必要がある。相手に対して決して容赦はせず、こちらの情報は必要以上に与えてはならない。

せめてこちらの聞きたいことを全て聞き出すまでは優位に立っている必要がある。

「そうね、どこから話すべきかしら。結論としてあなたの兄、兵藤一誠は1度死んでいるわ。天野夕麻：いえ、墮天使の手によってね。」

そこまでは聞いた話だとグレモリーの話を遮る。しかしこちらが聞きたいのはそんなことではない。なぜ生きているか、なぜ殺されなければならなかったのかを聞きたいのだ。

「だからどこで聞いてたのよ…」

まあその話はあとで聞くとしましよう、とりあえず一誠がなぜ生きているのかだったわね…」

グレモリーの話によると、イツセーが生きているのは悪魔が持つ他種族を悪魔へと変えるイーヴィルピースという特殊な道具を使い悪魔へ変えたから、狙われたのはセイグリッドギアとか言う特殊な力を持つているかららしい。

「さて、聞きたいことはこんなところかしら？次は私が質問させてもらうわよ。」

聞きたいことはとりあえず聞けたからいいだろう。次はオレの番か、特別隠す必要もないが喋りすぎることもないだろう。